南の島の子どもたち(3)

父と母と子の間

浅野　恵美子

○父親不在か母親不在か

父親の心理的不在が子どもの育ちに与える影響については、日本全体が既に社会的実験ともいえる経験によって認識するようになったと思う。その結果、父権回復を主張する向きも現れたが、強すぎる父権も父親不在と同じように子どもの性格に暗い影をなげかけるものだ。強い父権が、母親不在を作り出すのである。要は、父親と母親が互いに大切にし合うことができ、共に育ち合う関係をつくっているかどうかが決め手となる。

私は、教師として短大生と親しくつきあい出して十二年である。彼らとの付き合いによって、父と母の間のチームワークが家族の雰囲気を作り、その関係において彼女たちが引き受けた役割が、彼女たちの性格を育ててきているというのが見えてきたと思うのである。

ところで、沖縄の場合、父親が仕事におわれて家庭を顧みることがないという現代的な意味の父親不在もないわけではないが、それ以上に離婚による父親不在が目立っている。沖縄での離婚率は、全国一であり、昭和六十

二年の沖縄県の調査によると、母子家庭の数は全国平均の二・二倍、未婚の母の数は二・四倍もある。

離婚が多い理由については、様々な考えがだされているが、離婚は、男と女が学びとる必要のある重要な発達課題を内包している。今回は、沖縄をバックにおきながら、学生たちとの共同研究や母親たちから学んだ事等を通して、父（男）と母（女）の間にある課題について考えてみたい。

○離婚に寛大な沖縄の文化的風土

はじめに、沖縄の風土と歴史について触れることが必要だ。沖縄は、一つには、亜熱帯の風土が沖縄独特の社会的性格を育てた。ウチナーンチューは、沖縄で育った私自身そうであったが、明らかに計画性が弱い。風の吹くまま気のむくままというところがある。年中温暖な気候である為、未来の為に備えるということがさほど必要でなかった生活からきているだろう。自然まかせや成り行きまかせの生活感覚がある。

二つには、大和の封建社会という歴史的経験を沖縄の社会は経験しなかった。古代的社会から近代社会へと外からの近代化が進められた。その長所は、縦社会的な窮屈さがなく、他の県と比較すると横社会的であり、ある意味では自分らしく生きることを許容する社会的雰囲気が育っている。沖縄に住みついた他府県人も、沖縄の生活に慣れてしまうと本土の自分の故郷に帰って緊張してしまうというからおかしなものだ。反対に、本土から沖縄に帰省した人々は、沖縄に帰ると故郷に戻った安堵感を覚え、本土にもどりたがらない。

三つには、昔からの沖縄のまずしさは、男も女も共に助け合って働く良い習慣を育てた。共働きは、きわめて自然に受け入れられている。沖縄も男社会ではあるが、経済力を持つ働く女性は自立できるのである。

四つには、沖縄は地縁、血縁が強い社会であり、親族の相互扶助がある為、失業率日本一といわれながら、生活苦をおおらかに受け止めうる条件がある。

五つには、復帰によって福祉制度の奥恵を受けること

ができるようになり、加えて女性の人権を積極的に認める考え方が普及してきた。

以上のような要因が離婚を許容し可能にしている。離婚の自由は当然保障されるべきであるが、離婚には、様々が問題や困難もつきものなのである。

○復縁を迫った男のこと

私が、沖縄の男（それは女の問題でもある）の持つ問題、自我の弱さを意識しだしたのは、復縁をせまってもとの妻を殺害した男の事件に出会った時であった。

その男は、生活費を妻にわたさず、遊びほうけて家庭を顧みることがなく、妻の再三の抗議にも生活態度をかえないことから妻の要求で離婚した。しかし、離婚の意志がなかった彼は、別れた妻のアパートに何度もおしかけ復縁を迫った。妻が応じるはずはなく、口論の末、カッとなって、包丁で妻を刺し殺した。警察につかまった彼は、罪の意識はなく、彼女が自分のことを自分の母親にまでいいつけたのでカッとなったと答えている。

この身近に起こった事件の新聞報道に接して、別れた妻を殺して罪の意識がないということはどういうことか理解できないと思った。そこで、学生たちと一緒に大学祭で、実際に場面を組んで、行為法（ロールプレイ）で演じながら考えてみた。

場面1：復縁を迫る男とそれを拒否するもとの妻の対話

場面2：男の母親ともとの妻との対話

場面3：警察にいる男と男を責める亡き妻の友人

これらのロールプレイと討論によってはっきりと見えてきたことがあった。それは、この男は、甘えが強く子どものような感覚でいるらしいということであった。まじめになるとかやりなおすとか言うだけで受け入れてもらえると考えている。妻の方は、ききあきたセリフだといって取り合わないという関係である。この男は、現実のきびしさを受け入れず自分のやる気（動機）だけで、実績を示すこともなく自分を受け入れさせようとしていた。妻は、母親のように自分を支え、応援する存在でな

ければならないと感じていたのである。妻が独立した人格であるということがわからないのだ。女性を自分の手段としてしか認めることのできない幼児性があった。だから既に離婚しているという事実をふまえることができない上に、人を殺したという罪の意識が成立しないのである。現実に合わせ、他人の厳しい目を意識しようとしない幼児性がこのような重大な事件をひきおこしたのであった。そして、このような幼児性を育てたのは女であるということを考える必要がある。この男の父親のことはわからないが、はっきりしていることは、この男の心の中に父的なきびしさが機能していないことであった。母親中心で育てられたと思われるのである。

○妻の夫からの自立

こんな犯罪は、何処でも起こりうることではあるが、母親中心の育児は、こういう未熟さを育てる危険がある

ということである。実際、これほどではないが似たような子どもっぽい男性の事例は身近に存在しているのである。家庭裁判所の側からも「女が経済力を持ち、生活の基盤がしっかりしてくるにつれて、男の方は逆に怠け者になっていき、働かず、女に寄生するような生き方にのめりこみ、女性（妻）との間でトラブルを起こすことは、特に沖縄でしばしばみかける生活破綻のパターンである。」（広文堂「沖縄の文化と精神衛生」の中での郷司幸男氏の論文より）と指摘されている。

男は女より偉いという男社会的な考え方は、偉くなれなかった男の自己疎外を育てていくのである。そして、女たちは、納得いかない男のあり方について行かなくなった。女たちの自我が目覚めだしたのだ。女の目覚めに応じて男たちも変わっていくことが必要だ。子どもの育ちにとって、女（妻）の目覚めは大変重要なことであるということを教えてくれた母親の体験を紹介しよう。

その母親は、思春期の娘の性的な非行に悩んだ。彼女は、いろいろなことを試みたが、娘の非行は治らない。悩んだ末に、自分自身のことを振り返った。夫は、知的でニヒルな雰囲気を持っていて、それに惚れて結婚した相手である。惚れた夫の好みの女性になろうとがんばってきたが、自分のがんばりは何であったのか。自分を出すことなく、いつも夫の顔色を伺って伸び伸びしていなかった。その為、夫の横暴を許し、家庭の雰囲気を悪くしていると気づいた。離婚されたっていい、自分らしく生きよう。自分が自分らしく生きることが娘に何か言う前に必要な事なのだと悟った。こうして、彼女の夫への反抗が始まった。妻の決死の反抗に、意外にも、夫は、驚き、耳をかたむけ出した。自分だけが何でも知っているとばかりに高慢になっていた夫は、妻のいいぶんに一理あることを認め始めた。そして、自我を主張しだした自分の妻をみなおした。当然、家庭の雰囲気は変化し、対話のある家庭になった。

娘は、この雰囲気の変化の中で、自分を回復し非行から立ち直ったそうである。彼女は、娘の非行をきっかけ

に、夫から自立したのである。

○母子家庭と子どもの育ち

この母親の体験は、夫婦の発達の歴史の一般共通的なひとコマでもあると思う。子どもを育てることは、実に自分を育てることであったのだ。子どもは、父親と母親の関係の葛藤を通して、人間のあり方をも学ぶことができたのである。父と母がいて、共存の必要があったからこそ、葛藤も共存のすばらしさもわかるのである。ではそのような葛藤がない母子家庭の場合は、どうなのか。母子家庭で育った私の学生たちの場合について書いてみよう。

私の学生にも、母子家庭で育った人が結構多いのに驚いたが、沖縄の離婚率の高さを考慮すれば当然のことであった。ある学生などは、自分が未婚の母親の子であること、父が誰か知らないこと、母が言いたくなければいわなくてもいいと思っていると話してくれた。その彼女は、大変ひとなつっこく、やさしい子であった。

又、ある学生は、興味の湧くことは、良い成績を取るが、興味が湧かないと極端に課題にとりくめないところがあった。その為、彼女はとうとう望まない留年をし、保母資格も取得することなく卒業していった。歌がとてもじょうずで、余興の席のスター的存在であり、暖かい心の持主であっただけにとても気の毒に思ったものだ。彼女の場合は、自分に合わせることはいきいきとやれたが自分の意向に沿わない周りに合わせることが基本的に苦手なのであった。

哲学学生と呼ばれ、大変優秀であった母子家庭育ちの学生もいた。彼女は、一人の教師との人間関係につまずいて、レポートを書くことができず、頭の中では、課題内容についてたくさん考えることができていたにもかかわらず、その一つのレポートの為に留年するはめになった。彼女は、その教師を受け入れることができなかったので、教師に合わせようとしなかっただけであった。彼女は、知的な学生であったが、話を始めると相手を抜きにどんどんすすんでしまったり、人との話がはずむと、

約束して待っている人の事を考慮できないのであった。自分の考えをしっかり持っていたが、現実的に行動しないのであった。

母子家庭で育った学生は、非常に暖かいものを持っている場合が多いのだが、このように、自分に合わせることが上手で人や現実に合わせることが苦手な場合がしばしばみられたのである。

ただし、生活苦を引き受けている場合は、様子が違ってくる。母子家庭であって、母親の片腕として生活苦を引き受けていたある学生は、他の学生と比較すると大人っぽく男性的に育っていた。彼女の場合は、現実的な行動力は、抜群であった。

一口に母子家庭といっても、彼らの育っている関係はいろいろであって単純化はできないのだが、結果としてみれば、現代の生活においては、母親だけで育てると、性格的なかたよりができてしまいやすいのである。

○人類の発達課題

離婚、それはできれば子どもの為にも避けて欲しいことである。しかし、男と女の葛藤を通して、何かが学ばれてくるとすれば、過渡的な不幸かも知れない。

父が母を受け入れることができない場合も母が父を受け入れることができない場合も同じ問題が存在しているのではないか。それは、他者を受け入れることのむずかしさである。

我々は、自由な自分性、子ども性をなくしてはならないが、同時に自分とは違う他者をも受け入れていかねばならない。さらに、自分の主観を越えて厳然と存在している現実、事実性と付き合うことも必要である。人は、自己と人と物とを共存させた時に本当の自由を得るのである。

子どものような心は、うまくいけば暖かさややさしさに通じていくが、悪くすると自己中心から他者を殺すという犯罪にも通じてしまうのである。

南の島のおおらかさは、子ども的、自己中心的な自由さである。それは、ステキなことでもあるのだが、それ

だけでは不十分なのである。北の寒さや厳しさ（現実性）も学ばれねばならないし、他者性も学ぶことが必要である。他者性を許容しない子ども性は、自分をつぶすか他者をつぶすかという矛盾をはらんだ未熟な豊かさにすぎない。我々の内に組み込まれている自己中心性＝他者排除性を自覚せねばならない。

自己と他者との共存共栄には、他者を他者として受容することがどうしても必要なのである。私たちが希望し

求めている地球の平和というものは、この人類的な発達課題をのりこえることで作られてくるのではないか。

男と女（父と母）が共存共栄を育てるところから、共存共栄を育てようとの意志を持つところから、共に育てあえる方法を学んだところから、平和がつむぎだされていくのである。それは、健康な心の子どもが育ってくることでもあるのだ。

（沖縄キリスト教短期大学）